シュライアマハー『信仰論』解説

1　底本にまつわる問題

邦訳の底本として用いているのは、2003 年刊行のシュライアマハー全集、第一区分、第 13 巻（二分冊）に収録された『信仰論』第二版である。本書の『プロテスタント教会の原則にもとづいて組織的に叙述されたキリスト教信仰』と同じ名称で、第一版（1821/22 年）が全集の第一区分、第 7 巻（三分冊）として 1980-84 年に刊行されていることに言及しなければならない。長く絶版であった信仰論第一版の復刊がもたらした研究上の成果については、川島堅二、『初期シュライエルマッハー像再考—新全集刊行 10 年に寄せてー』、東京大学宗教学年報Ⅷ、1990 年、東京大学宗教学研究室、113-119 頁を参照していただきたい。なお併せて水谷誠『フリードリヒ・シュライエルマッハー—研究の現状と方法論的諸問題—』、基督教研究（2004 年）、第 65 巻 2 号、68-77 頁における、新全集 Kritische Gesamtausgabe に関連する叙述が参考になる。

さて底本としている第二版、先行した第一版の刊行と関連させ視野に入れつつ、両者の異同、展開を跡づける作業が求められるようになったことは言うまでもない。ただ解説の中では後続する段落において若干ふれてみたい。むしろ我々は先ず全集版の信仰論第二版（2003 年）に見られる成果、シュライアマハー研究への貢献として評価すべき点を確認したいと思う。

何よりも指摘しなければならないのは、信仰論第二版のシュライアマハーによる自筆原稿が、Walter de Gruyter 文書館に保存されているのが発見されたことである。これに関しては以下の刊行物を通して、その所在が公表されている。

Aus dem Archiv des Verlages Walter de Gruyters, Brief Urkunden Dokumente, Berlin 1980, S, 111: A. Werkmannskripte 2. und 3.

全集版の信仰論第二版の編集にあたったロルフ・シェーファーは、この手書き原稿の精度を確認し、編集作業に活用することが可能になった。これは信仰論第二版を編集し 1960 年に刊行したマルティン・レデガーの場合には、手書き原稿の存在を知り得なかったという事情と対比する時に、全集版の第二版が持つより高い順位を示しているといえよう。1980 年以降、今日なお継続されている新全集の趣旨に沿って、原稿に見られる句読法、またつづり字が正確に読み取れるようになったばかりではない。本文批評装置は、自筆原稿の印刷原本との相違およびシュライアマハーが最初の起草と植字工への原稿の手渡しとの間になした、原稿テキストの変更を確定し示すようになっている。

新全集における信仰論第一版が刊行された時に、シュライアマハーはその印刷原本とは別に保存本（ただし第一巻のみ）を所持しており、その欄外余白に自身で書き込みをした箇所が数多く存在することが公表された。この書き込みに校訂作業を経たものが、関連する文献資料とあわせて、新全集の第一区分、第七巻、第三分冊に収録されている。こうした書き込みが信仰論第一版と第二版との間の時期約 10 年に先ず記され、さらに書き加えられる経過をへてきたと思われる。したがってそこには第一版から第二版への叙述の補充に関わり、或いは第二版における展開への足がかりを示す示唆があるかも知れない。いずれにせよ新全集の信仰論第二版の校訂において、編集者シェーファーは、このシュライアマハーによる書き込みを、H の略号のもとに欄外に復元して研究者の便宜をはかっている。加えて H のあとにテキストの意図している関連が見られる個所に、該当する校訂原文の行番号が記載されており、参照に役立つと思われる。

さらに信仰論講義の筆記ノートに関連して、今回の全集版ではあらたに 1830 年夏学期の講義を聞いたヨハン・ハインリヒ・ヴィーヒャーンによる言及が加えられている。もちろんこうした講義ノート類は新全集の他の区分おそらく講義および筆記ノート

類を集めることになる区分において扱われるべきものとして、ここでは復元作業を差し控えている。しかし今後の課題を指摘している点では記憶されて良いと思われる。

２　内容の紹介

本解説の冒頭においてシュライアマハーが畢生の大作ともいうべき自身の教義学に与えた名称が、『プロテスタント教会の原則にもとづいて組織的に叙述されたキリスト教信仰』であることを述べている。しかし彼自身、当核書の本文において、『信仰論』Glaubenslehre の名称を幾度となく使用しており、これが通称として用いられてきたことも否定できない。そうした例にならって、ここに信仰論の内容を説明しつつ、どのような特色が見られるかに触れたいと思う。先ず最初に方法における特色にふれ、続いて構成における特色について述べることにしたい。

教義学の名称に代って信仰論を用いているのは、シュライアマハーに先立って、ジーグムント・ヤーコブ・バウムガルテンの『福音的信仰論』Evangelische Glaubenslehre（1759-60 年ヨハン・ザーロモ・ゼムラーによる遺稿出版）の例があげられる。しかしシュライアマハーがその信仰論において提起した、方法における転換には独創的な面が見出されることに注目したい。それは教義の学から信仰命題の学への方法における転換に外ならない（信仰論第二版第 15 項および第 16 項をあわせて参照されたい）。プロテスタント正統主義においては、教義は信仰の規範であり、信仰は教義命題を知的に承認することであった。これに対してシュライアマハーの場合には、教義に先行する信仰体験が母体となるべきであり、教義学の体系はキリスト教的体験の動きを跡づける働きをなしている。したがって教義学すなわち信仰論は、信仰を言葉によって語る、信仰命題の学と構成されるとの立場をとるのである。

『信仰論』は序論および本論の構成をもって組み立てられている。序論はそれ自体で本論から独立しておかれており、キリスト教を外側から区別するものを引き出し、普遍的客観的事実の面を示す性格のものになっている。その命題は倫理学、宗教哲学、弁証論からの借用命題であるとされ、ひろく人間存在一般から出発して、信仰の構造を明らかにし、後続する本論の内容に先行的理解を与えるのである。以下に第二版においてシュライアマハーが作製した序論目次をしるしておきたい。

序論（第 1-31 項）
説明（第 1 項）
　第一章　教義学の説明について（第 2-19 項）
序論（第 2 項）
　Ⅰ　教会の概念について。倫理学からの借用諸命題（第 3-6 項）
　Ⅱ　敬虔な共同体の差異全般について。宗教哲学からの借用諸命題（第 7-10 項）
　Ⅲ　固有の本質にもとづいてなされたキリスト教の叙述。弁証論よりの借用諸命題（第 11-14 項）
　Ⅳ　教義学とキリスト教的敬虔との関連について（第 15-19 項）

第二章　教義学の方法について（第 20-31 項）
序論（第 20 項）
　Ⅰ　教義学的資料のより分けについて（第 21-26 項）
　Ⅱ　義学の形成について（第 27-31 項）

さて序論に続く本論はキリスト教的敬虔の展開をあとづけた長大な段落から構成される。そこではキリスト者がキリストに対してもつ関わりのなかにすでに含まれている出来事、すなわち起り、成立し、今も展開しているものを、全体的に叙述することが企てられている。教義学的命題は、キリスト教的自己意識すなわち救済の信仰体験を言葉をもって表現している、この敬虔自己意識は同時に自己を規定する他者の意識と結合することになる。すなわち神と世界の状態についての表現という、三種の信仰命題が展開するのである。これを一方の軸とすれば、さらに今ひとつ、キリスト教的自己意識は、その中に前提され含まれる純粋なものと、罪過と恩恵との対立によって規定されているものとに二分される。あわせて後者は、罪過の意識および恩恵の意識の展開にさらに二分されている。かくして『信仰論』の本論は、方法の問題を扱う序論の段落と三一論にふれた結論の段落とを前後に置いて、第一部、第二部前半および後半とから成る、三種の敬虔自己意識の展開を、今ひとつの軸とするのである。

シュライアマハーの『信仰論』が示している構成上の特色は、教義学（組織神学）の歴史において独創性を発揮するものとして記憶されている。少なくとも本論についてそれは妥当するであろう。そうした点を理解いただくため次のような図に示すことにしたい。

その1：三種の信仰命題の軸

	Ⅰ 敬虔自己意識それ自体	Ⅱ 対立によって規定された敬虔自己意識	
		恩恵の意識	罪過の意識
人間	創造と保持	キリスト救済の授与	原罪と行罪
神	神の属性	聖霊・恩恵の手段・教会・終末	悪
世界	原初状態	神の属性	神の属性

その2：三種の敬虔自己意識の軸

	Ⅰ 敬虔自己意識それ自体	Ⅱ 対立によって規定された敬虔自己意識	
		恩恵の意識	罪過の意識
人間	敬虔自己意識の記述	敬虔自己意識の記述	敬虔自己意識の記述
神	対応する神の属性と行為称式	対応する世界の状態	対応する世界の状態
世界	対応する世界の状態	対応する神の属性と行為称式	対応する神の属性と行為称式

ここに示したその１およびその２の両軸を結合して本論の構成が組み立てられる。以下の略図の形でえがくことにする。その際に段落ごとに項数の通し番号と取り扱われる教義学の名称とを記入している。

	Ⅰ	Ⅱ 対立によって規定された敬虔自己意識	
	敬虔自己意識それ自体 第 32-61 項	罪過の意識・恩恵の意識 第 62-169 項	
	序論 第 32-35 項	序論 第 62-64 項	序論 第 86-90 項
人間	創造と保持 第 36-49 項	罪過 第 65-74 項	恩恵・キリスト・救済・再生・聖化 第 91-112 項
神	永遠・偏在・全能・全知 第 50-56 項	悪 第 75-78 項	教会・終末 第 113-163 項
世界	世界と人間の根源的完全性 第 57-61 項	聖義 第 79-85 項	愛・知恵 第 164-169 項

第Ⅰ部および第Ⅱ部から成る本論に先行して、すでに述べた序論（第 1-31 項）があり、本論の叙述に続いて神の三一性を扱う結論（第 171-172 項）が来ることは言うまでもない。『信仰論』の構成とくに神論（神の属性）の位置に関して、伝統的教義学の体系との相違について、後述する「現代的意味」のところで触れることとする。

３　執筆の事情

我々が『信仰論』を手にする時に、直ちにそのいずれもが通し番号によって配列された構成をもつことに気づかされる。第二版を例に取るならば一七二のパラグラフ（項と本書では訳している）から成っている。しかもそれらすべてにわたって、冒頭に先ず後続する叙述の内容を要約する原則的なことをまとめた短い文章がおかれる形式をとっている。

この主旨命題に続くのが、本文叙述が展開する場所となる。その際にひとつのパラグラフ（項）の中には幾つかの小段落に分けられており、それらにも通し番号を付けて整理する手法が採用されている。主旨命題がむしろ入門者風の短いものであるのに対比して、後続する諸段落にはシュライアマハーによる説明、解釈、展開などが、教科書風にまとめられた叙述とともに繰り広げられている。

こうした体裁は『信仰論』第一版においてすでに採用されていた。むしろ第二版を出版するに際して

シュライアマハーはそれを引き継いでいると言って差し支えない。

さて再度にわたる『信仰論』の出版には、その背景にシュライアマハーがハレおよびベルリンの両大学において行った講義が存在していた。それらは通算 13 回に及んでいる。いま煩雑さをいとわず列挙することを許していただきたい。すなわちハレ大学においては 1804-5 年冬学期および 1805-6 年冬学期に行われている。またベルリン大学においては、1811 年夏学期、1812-13 年冬学期、1816 年夏学期、1818 年夏学期、1818-19 年冬学期、1820-21 年冬学期、1821 年夏学期、1823-24 年冬学期、1825 年夏学期、1827-28 年冬学期、1830 年夏学期に、それぞれ教義学・信仰論関連の講義がなされている。当核大学の講義要覧によってこれらはこんにち疑問の予地がないことが確認されている。

シュライアマハーの講義が話題にのぼっていることに関連して、ここで我々が『信仰論』の叙述に接するにあたって、記憶し理解しておくべき点に言及したい。すなわち講義を行うにあたって、事前に準備したノート或いはメモをもとに、そこに記された事項を扱うのに終始することがないのがシュライアマハーの常であった。換言すれば講義のなかでその場で新しいアイデムが多く生じ、その場で思索を進めつつ語り続けるタイプの思想家であったことである。したがって講義の要点を書きしるす場合にも、その殆どが講義のあとで筆をとり、要点をまとめ整理をし更に書き加えたりしていたことが考えられて当然である。彼自身もそれを 1818 年 5 月 11 日に友人ヨアヒム・クリスチャン・ガスにあてた書簡のなかで認め、「今日まで私はなお、講義のあとに本当に整理して書くことにしている」と述べている。これはシュライアマハーが言葉によって語る能力抜群の人であったことを物語っているばかりでなく、その人柄をも示す事実として覚えられてよいと思われる。講義のあとに書き留められた文章が、さらに講義が進められる中で書き加えられ、さらに展開されて行くという経過の後に、我々は印刷された『信仰論』の叙述に接している。したがって幾重にも層をなして残されている『信仰論』の内容を、熟慮しつつ判断し解釈を行うことが求められているのである。

『信仰論』第二版における執筆の事情に関連して、ここで是非とも言及しておかねばならない事柄がある。第一巻序論に先立つ序言のなかでシュライアマハーは次のように述べている。「この新しい版において私が取っている手続きについては、すでに他のところで主要な点において説明をしている」。ここで指摘しているのは、第二版刊行の直前、すなわち 1829 年に発表された、『信仰論について・リュッケへの回覧書簡』2 通であることは言うまでもない。これの書簡は最初に、神学雑誌 Die Theologische Studien und Kritiken, 2(1829), S. 255-S. 288 および S. 481-S. 532 に掲載されている。回覧書簡の受取人として指名されたフリートリヒ・リュッケは、この当時ゲッティンゲン大学の新約学教授として活動しており、シュライアマハーとは親しい関係にあった。併せて前記神学雑誌の編集者のひとりであったことも、シュライアマハーが回覧書簡の受取人として指名する理由であると思われる。

さてリュッケにあてた 2 通の回覧書簡が『信仰論』の研究に寄与し得る理由として、それらが『信仰論』第二版の刊行直前に発表されており、シュライアマハー自身が第一版の内容と比較しつつ、第二版における叙述や構文を説明していることを指摘できる。そこで明らかになる事柄は、回覧書簡が単に『信仰論』第一版から第二版への思想展開あるいは第二版への入門的な導入の役割を示しているとする面からのみ論ぜられるべきではない。書簡の形をとりつつ率直かつ自由に、シュライアマハーは『信仰論』について全体的に思うことを述べている。学術書としての体裁を保持する『信仰論』の叙述からだけでは、容易に伺い知ることの出来ない点が、回覧書簡を通して明らかになる。

いまはそうした内容を細かに述べることは断念せざるを得ないが、中心的な論題のみをあげることに留めたい。すなわち一方では、2 通の回覧書簡とくに第一のもののなかに、『信仰論』第一版について同時代の神学者や哲学者の名をあげつつ、第一版について寄せられた批評に答え、対論をさらたに継続することを表現している。他方において第二の回覧書簡において、『信仰論』の序論と本論との関係、また本論を構成する第一部と第二部の置き方について、シュライアマハー自身は長いあいだ考慮せざるを得なかったが、最終的に順序の変更をせずに第二版の

刊行にいたった次第を述べている。

最後に我々は現在この回覧書簡２通の邦訳を持っていることを指摘したいと思う。それはジェームズ・デューク/フランシス・S・フィオレンツァ・松井睦/上田彰訳『シュライエルマッハーの神学』、2008 年、ヨベル社に収録されている。すなわち「リュッケへの第一の手紙」（61 頁-101 頁）および「リュッケへの第二の手紙」（103 頁-163 頁）に掲載されている。なお本書はシュライエルマッハー神学の入門的解題を冒頭に置き、回覧書簡二通を英訳し編集して、1981 年に On the Glaubenslehre — Two letters to Dr. Lücke と題して米国において刊行されている。注と索引はかなりの数にのぼるうえに、巻末につけられた語句索引は邦訳に際して新たに作製されたものであり、その点では訳者の労を多としたい。ただ上記の個所におかれた回覧書簡の閲読にあたっては、太字で付けられた表題は英訳に際して編集者によって書き入れられたものであり、回覧書簡原文にはないことを留意する必要がある。

４　時代背景

シュライアマハー（1768 年-1834 年）の生涯は、18 世紀最後の３分の１から 19 世紀最初の３分の１にわたっている。その時代背景について思考をめぐらすに際して、我々はシュライエルマッハーが接していた時代思潮の面と、さらにシュライエルマッハーが置かれていた環境、とくに教会および大学の面とから、重点的にまとめたいと思う。

「1770 年ころから 1830 年ころまで、実際ドイツの知的、文化的生産力はまったく他に例を見ない高まりを示したのであった。それは文学におけるゲーテとシラーの時代、あるいは疾風怒涛（シュトルム・ウント・ドランク）と古典主義・ロマン主義の時代であり、哲学におけるカント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルの時代であり、メーザーやヘルダーによる歴史的世界の再発見の時代であり、ヴィンケルマンに始まるギリシャ古典美の再評価の時代であり、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語研究と新人文主義の時代であり、そして音楽におけるハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの時代であった。」（『世界歴史体系ドイツ史２、山川出版社、1996 年、166 頁-167 頁』）

「1770 年代に始まるドイツの新しい文化的諸潮流は、文学から哲学、思想、そして音楽の分野にもおよぶが、これらは一括してドイツ『理想主義（イデアリスムス）』と呼ばれることが多い』。（前掲書、175 頁）

長文にわたる引用で申し訳無いが、これらはシュライアマハーが接した時代思潮であるドイツ理想主義 deutscher Idealismus の概要を適切に説明していると思われる。なお関連している辞典項目として次のものを加えておきたい。「ドイツ・イデアリスムス」、『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2001 年、791 頁-793 頁を参照していただきたい。

シュライアマハーにおける時代思潮

さきにドイツ理想主義（イデアリスムス）として総称した時代思潮に関連して、シュライアマハーがその思想形成にあたって直接的つながりを示しているものをあげたい。いま 18 世紀 90 年代に焦点をあてると、そこに敬虔主義、啓蒙主義、ロマン主義が見られる。敬虔主義は両親を通して影響を受けたものであり、成長とともに反発をする。啓蒙主義はハレ大学での勉学以来さらに関心をふかめ、とくにカントの批判哲学を吸収し、また対決を続ける。宗教的敬虔さと理性の自立を掘りさげて哲学する態度との結合は、やがて自身の神学・哲学を形成するシュライアマハーのなかに保存されている。さらに 90 年代後半からベルリンのロマン主義サークルと接触したことは、無限であり到達不可能なものへの憧憬を感じとっている。こうして神的なものからの距離、それへの到達不可能と、神的なものへの関わりとの緊張的把握を、シュライアマハーは課題として取り組み、神学と哲学について自身の思想を形成する道程を進むことになる。

シュライアマハーにおける環境

（教会）

アウクスブルクの宗教和議（1555 年）からヴェストファーレン和約（1648 年）にいたる過程のなかで、領邦国家と教派教会の一体的関わりを表現するのは、

「領土の属する人に宗教も属す」という定式であった。しかしキリスト教の各教派を地域に固定させていた原則が、実質的に効力を失って行く過程の到達点を象徴的に示す出来事が、1803 年に起こっている。それはライン左岸地帯がフランスに併合された後に、この年にナポレオンの主導のもとでレーゲンスブルクで開かれた帝国代表者会議の主要決議をさす。そこでは帝国諸侯領、帝国都市の多くが消滅し、小領邦の大部分は大領邦に結合されるという大がかりな再編が行われた。その結果は、「この再編成のなかで膨大な数の住民が所属する国を変え、今や多くの領邦国家がカトリックとプロテスタントが併存する事態が自明のものとなった」。(総説キリスト教史 3 近・現代篇、2007 年日本キリスト教団出版局、第 3 章ヨーロッパ大陸のキリスト教、184 頁より)

こうした事態の変化に関連して、領邦教会において、またこれと並行する形で、教義の体系としてではなく、むしろ個人の生き方としてキリスト教信仰を把握する考え方が、18 世紀に表われ広がってきていたことに言及しなければならない。この動きを示す人々は領邦教会のなかに留まりつつ、しかし批判的に吟味し、教会を自由に論ずることに関心を持ち続けた。キリスト教真理に対する関係を非常に個人的な事柄とする態度を根拠として、現存する教派教会への関係を作ったのである。

（大学）

18 世紀に大学は大きな変革をとげるに至った。学術研究の中心はドイツ各地のアカデミーに置かれており、大学は全体として時代の要請に答えられず、廃止されるものも出ていた。しかしそれまでの教授職相続、貴族子弟優先入学の特権などが廃止される動きが増大するに至った。あわせて近代的に改革された大学の創立の刺激（1694 年ハレ、1737 年ゲッティンゲン、1810 年ベルリン）により、18 世紀後半から 19 世紀始めにかけて、大学の位置づけに大きな関心が向けられた。ベルリン大学について制度として実施されているものを指摘したい。学生には高校卒業資格、在学年令 18-23 才、在学中の試験制度、卒業にあたっての国家試験（牧師、教師、法律家、弁護士、医師）が求められた。教授には研究と教育への能力による採用、学位と教授資格の授与が求められていた。また大学は研究と教育の内容、教授の採用と学生の入学許可、規約の決定権を認めている。

ベルリン大学はプロイセンがナポレオン戦争で失ったハレ大学に代る新しい大学として創立された。フランスで一般的であった専門学校ではなく、諸学問の総合理念のもとに近代的改革大学が形成された。内務省文教局長の任にあったヴィルヘルム・フォン・フンボルトの名をとって、名づけられたいわゆるフンボルト理念は、研究と教育の両面にわたる大学の位置づけを指示するものとなった。フンボルトの理念がただちに実現しているとは必ずしも言えないものの、その理念が及ぼす影響は忘れられていない。

シュライアマハーの墓前にて。1994 年 8 月・ベルリン

5　現代的意味

シュライアマハーの『信仰論』をくまなく通読して行く時に、この大作の基礎に置かれ動いている意図が、我々の前に明らかになる。それは次の 3 点にまとめることが出来よう。すなわち第一に宗教（キ

リスト教）に独自の領域を確保し、次に近代的な関連する学問と折衝し成果を受け止め、さらに伝統的教義を解釈し内実を活性化する意図である。この三者が互いに分離することなく結び付き渾然とした一体を志向している。こうした点において『信仰論』はたんにシュライアマハーが残した神学的諸著作の代表であるのみならず、また近代プロテスタント神学における組織神学の古典的業績の位置を保持して今日に及ぶ。

ここで我々は『信仰論』がもつ現代的意味を、幾つかの点に触れつつ略述して見たい。いささか断片的に留まるとしても、問題に取り組む端緒としてお役に立つならば幸いである。

始めにシュライアマハーが提示している神論（神の属性）の位置づけに関して述べたい。『信仰論』において神の属性は、伝統的な教義学の例に従うかたちで、すなわち、永遠、遍在、全能、全知、聖、義、愛、知恵を中心に取り上げられ、論じられている。しかしこれらの属性は、神と関わる人間の絶対依存感情に即してこそ、内実が生きてくることを提示している。この点にシュライアマハーの属性理解ひいては神論がもつ特色があると言わねばならない。すなわち神の存在がもはや自明の理ではなくなった、近代プロテスタンティズムの直面する事態を洞察するシュライアマハーの立脚点が見えてくる。哲学との連携のもとに神の存在と本質について語ることが自明であった、伝統的な教義学体系の足元が崩れているからである。それと同時にプロテスタント正統主義神学に対する批判の声を高める啓蒙主義的神学のなかにも、思弁的な神観念が残っているのを、シュライアマハーは批判せざるを得なかった。このような広大な視野のもとに『信仰論』における神の属性に関する論議が遂行されている。この意味でエマーヌエル・ヒルシュがシュライアマハー研究者として発表してきた批判的見解とは別に、「懐疑的無神論と神秘的正統主義との間にあり、われわれ現代人に残されている道はせまい。それを見出す者は少数である」（近代神学史 E. Hirsch, Geschichte den neueren Evangelischen Theologie im Zusammenhang mit den allgemeinen Bewegungen des europäischen Denkens, Bd, 5. 1960, S. 316 より引用）と言い残した。シュライアマハーをその生きた世紀を超えて影響を与え続けている。数少ない独創的な思索家に属する存在であると指摘する言葉は、忘れることの出来ない意味を持つと思われる。

次にシュライアマハーは近代プロテスタンティズムの本来的な主唱者であり、その永続的方向性の形成者であることに触れたいと思う。シュライアマハーが叙述した神学思想は、評価と批判の両面において、近現代のプロテスタント神学の議論に関わりを持っている。そしてシュライアマハーに対する反応においては、一方的にそこへ立ち戻るのでも、また理念はすでに終焉したと断定し離れるのでもなく、批判的評価の道のりを進む者の労作が重視されて来たのである。すなわちシュライアマハーと共に、シュライアマハーを乗り越えることを意図する課題を継承し続けたことが明らかになっている。いまその事例をあげるならば、アドルフ・フォン・ハルナック（『神学部の課題と一般宗教史』1901 年、そして『神学部の意味』1919 年）およびエルンスト・トレルチ（『学問としての神学半世紀の回顧』1908 年、そして『近代におけるプロテスタント的キリスト教と教会』1906 年、1922 年第三版）の両名を指すことが出来よう。これらの著作や論文に接する時に、我々はシュライアマハーとその業績に対して、率直な批判とともに尊重し評価する姿勢を見出すのである。

最後にシュライアマハー神学の現代的意味に加えられるに相似(ふさわ)しい研究題目として、ロイエンベルク一致協約との関係をあげて見たい。この協調協定は 1973 年にヨーロッパにおける、宗教改革に起源を持つ、ルター派、改革派、合同派による共通の信仰告白作成を指向している。宗教改革時代になお対立点として残されてきた聖餐、キリストの救済、予定などの教義を、共通の理解へと近づくため、歩みより把握する作業を継続している。『宗教改革諸教会の協約構想』は 1973 年以後、何回かにわたる改訂と確認がなされてきた。教会の組織合同を急いで成しとげるのではなく、福音を共通に証言するプロテスタント信仰の内実を、教会共同体の形成を重視しつつ相互に歩みよる対話の作業として、地道にまとめる仕方にさらに多くのプロテスタント諸教会が賛意を示す成果に至っている。こうした継続する作業のなかに、シュライアマハーが『信仰論』を通

して提起し語りかけているものに相通ずる、研究題目が見出せるかも知れない。

6　研究史

シュライアマハーの場合に研究史を、関与した学問領域（神学、哲学、教育学、解釈学など）すべてにわたって網羅する形で扱うことは至難のわざである。したがって今ここでは、その神学思想に関する研究の展開と反応の経過に重点を置くほかはない。そして19世紀から20世紀をへて最近までの研究の概況を叙述した論文、単行本を3点ほどあげるにとどめたい。

Hans—Joachim Birkner, Theologie und Philosophie. Einführung in Probleme den Schleiermacher-Interpretation, München 1974, (Schleiermacher-Studien. Berlin 1996, S. 157-S. 192 に収録)

ビルクナーは 44 頁にすぎない小著のなかに、神学と哲学の関連をどのように設定できるかが、シュライアマハーが解釈の諸問題を形成してきたという課題を提起する。この視座に立ちつつビルクナーはシュライアマハー研究の入門を試みている。先ず前半に19世紀から20世紀に及ぶ解釈の諸類型を分類し、方法上の手続きを見出すことに努める。続く後半には『宗教論』、『神学通論』、『信仰論』において、神学と哲学の関連が解明される道筋を、主として第二次大戦後の研究成果を用いて説明している。本書を通読することにより研究史の方向づけを学ぶとともに、研究者自身の立つ位置を吟味し検討する手掛りとなし得るであろう。

Terrence N. Tice, Schleiermacher Bibliography, with brief introductions, annotations, and index, Princeton/New Jersey 1966.

Schleiermacher Bibliography (1784—1984), Updating and Commentary, Princeton/New Jersey 1984.

T･N･タイスによるシュライアマハー文献目録は、1966年版においては150頁を超え、1984年版も100頁を上回る分量をもつ大部な労作である。いずれもシュライアマハーの生涯と作品、年代別に区分された文献、教育学関連文献に整理され、配列の手際よさが目立っている。とりわけ在世時にさかのぼり作品に対する批判と評価をあわせて一覧できるようにして、今日に及ぶ研究経過の解明に資するという、編集ぶりには敬意を表したい。なおこの文献目録はさらにアップデート版が、1987年、1990年、1994年にわたって継続し出版されている。これらはシュライアマハー研究雑誌 New Athenaeum-Neues Athenaeum の第一号、第二号、第四号に収録されていることを付言したいと思う。

Ulrich Barth, Schleiermacher-Literatur im letzten Drittel des 20. Jahrhunderts, ThR 66(2001), S. 408-S. 461.

ウルリヒ・バルトがまとめたシュライアマハー研究の単行本および編書の一覧は、多数の文献を紹介するのが目的ではなく、厳密な書評の集合としての内容を保っている。最近の約 40 年の成果として取り上げるにふさわしい51点を以下の12の題目に整理して提供している。すなわち青年期の原稿類、初期シュライアマハーの理念史的環境、宗教論、解釈学、倫理学、後期の伝記、神学通論、教会史の解釈、資料的教義学の諸主題、弁証法、宗教哲学の概念、体系統一の問題がそれである。バルトの論文はシュライアマハー研究の進展しつつある現況を、具体的に知る恰好の手掛りとなるであろう。21世紀の冒頭にこれが発表されていることから、その続編が近い将来に記されることを楽しみにしたいものである。

7　文献紹介

ここではシュライアマハー研究の現在における全体の姿を的確に伝える 3 点の叙述に言及して、文献紹介の役目を果したいと思う。これを足掛りとして活用していただけると幸いである。

事典項目 Schleiermacher, TRE Band XXX(1999) S. 143-S. 189, (Hermann Fischer),

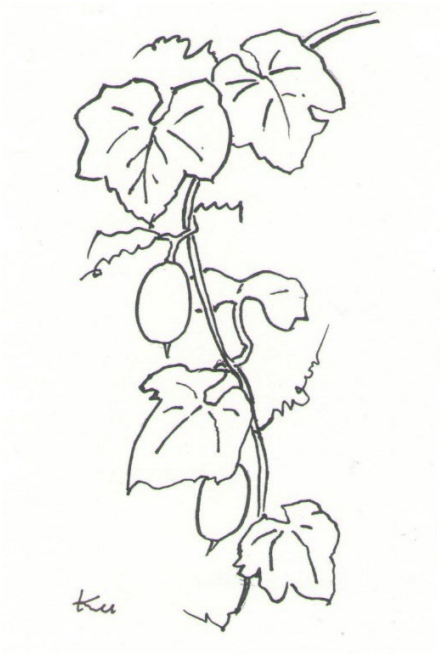
神学百科事典 Theologische Realenzyklopädie 第 30 巻に収録された『シュライアマハー』は大項目なみの分量をもち、内容のうえでも良く整理されている。とくに 182 頁から 189 頁に記載された研究文献は 20 世紀の殆どすべてに及ぶ厖大なものである。著者名がアルファベット順に配列されているのに馴れれば、この文献表はシュライアマハー研究の展開のあとを、極めて的確に示してくれることが明らかになる。

Hermann Fischer, Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher (Beck'sche Reihe; 563: Denker), München 2001.

ヘルマン・フィッシャーが単行本 168 頁にまとめた本書は、入門書としてのみならず、シュライアマハー研究の進展に励みを与えることになろう。とりわけ巻末に加えられた付録の中にある、各章ごとに分離して編集された文献目録は、著者の配慮が示されるように思える。さらに項目索引がついているのは、本書全体にわたる内容を把握するのに便利であり良い貢献として忘れてはならない。

Kurt Nowak, Schleiermacher, Leben, Werk und Wirkung, Göttingen 2001.

クルト・ノウヴァクがいだいていた、シュライアマハーの伝記を新規に仕上げる計画は、2001 年に 632 頁の大部な著作となって実現した。著者は出版の年 2001 年大みそかに病没したことと併せて、本書が残している刺激と貢献はながく記憶されるであろう。

解説の終りに付録として、これまで刊行されてきた『信仰論』の部分訳・抄訳を加えることにしたい。あわせて『神学通論』についても言及するのを許していただきたい。

大島豊、シュライエルマッハァの信仰論、第一書房、1934 年
（第二版すべてを訳したものである。各項ごとに記すにあたり全体の意味に重点をおいた意訳をなしている）
三枝義夫、シュライエルマッヘル・信仰論序説、長崎書店、1941 年
シュライエルマッハー、リッチュル（現代キリスト教思想叢書 1 ）、白水社、1974 年
・深見茂、説教六篇
・今井晋、キリスト教信仰（抄）
加藤常昭、神学通論、教文館、1962 年（1830 年第二版を訳したものである。）
・神学通論（1811 年/1830 年）
加藤常昭・深井智朗、教文館 2009 年
（第一版・第二版が収められている。巻末につけられた用語解説は充分に役立つであろう。）